

書評

鈴木弘道著

「寢覚物語の基礎的研究」

土岐武治

鈴木弘道氏の御高著「寢覚物語の基礎的研究」は全篇四四九頁に及ぶ大作の御本で、その著作の目次は、先づ冒頭に序説を配し、次に第一章として、寢覚物語の伝本に関する考察、続いて第二章は寢覚物語の成立に関する考察、そして第三章は寢覚物語の素材に関する考察という具合で、その後には付録として、寢覚物語絵巻詞書註釈と寢覚物語研究文献目録とが収載され、更にまた索引、後記も加わるといふ順序になつている。これらの中、上述の伝本に関する考察は全頁の九十二頁、成立に関する考察は八十五頁、素材に関する考察は九十頁となり、これら三章併せて二百六十七頁で、本書全頁の五十九・五%本研究書の中心を占めてゐる。

本書の末尾収載の研究文献目録を検討し

書評 鈴木弘道著「寢覚物語の基礎的研究」

でも解るように、鈴木氏は今日まで夜半の寢覚論文として、単行本所収論文、及び雑誌所載論文など併せて四十種にも及ぶ業績を持つて居られるが、今回の「寢覚物語の基礎的研究」の内容は、同書の後記にも「これらの論考には、断片的に発表した旧稿を補訂したものがかなりあるから云々と伝える通り、著者が今日まで上述の如く発表された諸論文に更に筆を加えられ、調査研究を取揃えてまとめられたものが、本書の全貌と思われる。

この本の序曲ともいふべき冒頭の序説には、「第一節寢覚物語の創作意義」を明らかにし、その中に、寢覚物語の創作手法は源氏以後の並流文学作品と同様に源氏物語の趣向を模倣し、又その模倣も当時の物語創作の必然性から斯くしたものであるとの

ことを考証づけている。尚これらの考証手段の一つとして無名草子の寢覚への批判態度を重要な、その参考としているところに本書の特長が窺われる。例えば筆者は無名草子には、「源氏物語をはじめ先行の作品に対する模倣そのものを非難する個所はどこにも見当らず、むしろその模倣を当然のこととして認容するそぶりさえ見受けられる」と述べている辺に、その間の事情がよく表明されているのである。尚平安末期の物語研究こそ源氏研究の一環でもあると考えられるということを本節の最後に力説しておられる。

序説の第二節として「寢覚物語研究の現段階と問題点」として、一、伝本の研究 二、作者・成立年代の研究 三、關卷に関する研究 四、註釈の研究 五、その他として、寢覚物語絵巻・寢覚の題号その他についての現段階と問題点という体裁で纏々述べているが、著者は要するに寢覚研究はまだ基礎的な研究の範囲を出ていないと結論づけているのである。

さて、この序説の次は、いよいよ本論で、

その第一章は「寢覚物語の伝本に関する考察」と題し、前田家本の特徴、中村本の資料的価値、黒川本最善本説批判などを書き立てられている。元来寢覚の現存諸本には、原作系のもの八本、改作系のもの二本とされているが、筆者は改作系の前田家本こそ「他本に比類なき最も貴重なる伝本」と認められている。その考証の方法は、細部に亘つて本の内部的・外部的な徴証を糺し、その結果斯く云われたものである。

前田家本の解説の次に中村本の資料的価値について述べられている。この中村本は、神宮文庫本（中村本の巻二に相当する部分しかない写本である）と同様、改作系の本であるが、原作系の中間、末尾などの欠巻部分の内容についての想定や、流布本の本文研究に大きな役割を果す諸点について種々実証しておられる。

この章の最後は「黒川本最善本説批判」の論考となつている。藤岡作太郎博士は「国文学全史」の平安朝篇に、この本を初めて紹介されたものであるが、惜しい事には黒川本を中村本同様に寢覚の改作本と見

誤られたものである。ところで藤岡博士と同じ頃に大野木克豊氏という方が居たが、この方の「寢覚物語考略」の一部が雑誌「文学」や関根・小松両氏共著「寢覚物語全釈」に発表紹介されたものである。それによると、「最善本と云われた前田家本も所謂黒川本なる古写本に比すれば、決して優れりと云うを得ない」と述べて居るが、著者はこの黒川本の紹介本文の異文と前田家本とを対校精査し、又その作業のみに止まらず、更に原形本の諸本をも併せ参照されて黒川本の正体をつかまれた結果、大野木氏の云う黒川最善本説は、根拠薄弱なることが解り、本項はそれらに関する高説である。

本論の第二章は寢覚物語の成立に関する考察となつている。すなわちその第一節は従来の研究とその批判で、第二節は寢覚・浜松の歌と菅原孝標女の歌との比較から成り立つている。つまり、定家自筆の更級日記の奥書や拾遺百番歌合の最初に更級日記の作者孝標の女が同時に夜半の寢覚・三津の浜松と同一作者であるという記事が見え

るが、著者は、第一節に於てはこの伝説についての従来の肯定説・否定説を整理し客観的な批判を加えられたのである。第二節では以上の見地から更に寢覚・浜松作者の和歌と孝標女の和歌とを比較して、それらの作者推定の一試論を進めたのである。この場合寢覚の作者の歌については、夜半の寢覚物語所載の和歌は勿論、拾遺百番歌合、風葉和歌集、無名草子、或は寢覚物語絵巻などに見える寢覚の歌で他本と重複しないものを見て網羅収録し、上述の如く比較検討なされたのである。その結果として著者は「どうしても寢覚・浜松孝標女作こそ最も妥当な結論とすべきではないかと思われなくては」と従来の肯定説に疑問を持たれながらも斯く認容されている。第三節の「寢覚物語の成立年代覚書」では、従来の成立研究の内容を再吟味し、或は又私見を試みなどされているが、この場合にも著者自ら「いづれも根拠薄弱で、それ故強く主張する気持など全然ない」と述べられる。つまり著者は、ここで現在の段階においては本當に解らぬということが解つたということ

の客観条件を陳述されたように伺われる。

本論の第三章は寢覚物語の素材に関する考察として、第一節は主要登場人物の準備、第二節は天人降下事件、第三節は地理的素材とに分けられてある。この登場人物の準備についての解明には、資料的に乏しい現状に於ては頗る困難なものがある。その中で著者は但馬守時明について、故関白について、内大臣すなわち寢覚の男主人公(中納言)の四人について細密なる検討を加えて取扱っている。そして、著者はその結論として、これら作品の登場人物の典拠は、史実からヒントを取る一方源氏の該当人物をそれに混入しつつ描いたものではなからうかと推測している。第二節の天人降下事件とは、夜半の寢覚物語の冒頭に見える事件であつて、八月十五夜、夢に天人が現れて女二宮に箏の琴を教へ、翌年も又教えるというのである。この記事の準備について

著者は、これは琵琶伝説話の変型ではないかとも推定されるが、果してどうかと疑問視の中に斯く言われているのである。第三節は地理的素材として物語に見える、九

条・一条・石山・西山・嵯峨野、北山などの地名の所在を山城名勝志とか、平安通志などの書物によつて、寢覚におけるそれらの場所を解説したものである。

最後に付録として、その第一に寢覚物語絵巻詞書註釈を掲げている。この絵巻詞は奈良県大和文華館蔵の絵巻によつたものである。かつて藤田徳太郎・増淵恒吉両氏共著「よはのねざめ」註釈書の末尾にも、田中親美翁の模写本による寢覚物語絵巻の絵詞の頭註が収載されている。ところで鈴木氏の絵巻詞の註釈は頗る詳しく、種々の点において藤田・増淵両氏の頭註の不詳や不備の箇所を増補訂正したものと云つて、決して過言ではなからう。付録の第二として、寢覚物語研究文獻目録が収載されているが、今後の研究者に色々の便宜を与えているものである。

以上本書を通読して感ずることは、それらの高説は全く学界未踏の新説と云うよりも、寧ろ従来の専門諸家の旧説をば、著者の周到な実証によつて批判し、その結果妥当と推断される方の研究を採択して、更に

当該説に考証を積み重ねる手法によつて學問上一步前進を期しているように見受けられる。

ただ本書の卓説中次の事項に関しては、聊か疑義を感ずるので、左に浅学を顧みず私見を述べてみることにする。

(1)「第一章寢覚物語の伝本に関する考察」の「第一節前田家本の特色」五七頁のところに次の一文詞が見える。

つとめてより雨降り暮らせば、月もあるまじきなめりと口惜しう眺め暮らすに、夕ざりつ方風打ち吹きて、月ありしよりも空すみて明くなりぬ。(校註夜半の寢覚本 六頁)

右の「空すみて」の用例として、本書六一頁に著者は、「対光源氏物語新釈」によつて次の二例をあげている。

(一)月は入方の空清う澄みわたれるに(桐壺卷)

(二)をやみなかりし空の気色、名残なく澄みわたりに(明石卷)

この事に関し私の不審な点は、(一)の用例「月は入方の空清う澄み渡れるに風いと涼

しくなりて云々」の旁線の個所であるが、その通釈は「入がた近い月影は水のやうな空に澄み渡つて」となるべきである。従つて主語・述語の関係は「月は……澄み渡れるに」となる文体なので、上の「空すみて」の用例としてどうも納得し難い。殊に桐壺のこの用例文の前、つまり輒負命婦が勅旨を奉じて更衣の母を訪ねられる時の情景の一文に「夕月夜のをかしき程に出し立てさせ給ひて」とあり、又上の(一)の用例の後、すなわち命婦が復命を申せば、帝は悲嘆を新しくなさる一詞中に「ことにもあらず思し消ちて、もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。」とあつて、(一)の用例の澄み渡れる入方近い月もこの場面に入ると西に落ちたとなつてゐる。このように「夕月夜……出で」の文面の後は「月は澄み渡れるに」・「月も入りぬ」などとなつて、物語は月の動きを配して時の経過を叙していることから推しても、著者が云われる用例(一)の「澄み渡れる」の主語は「月は」でなくてはなるまい。なお参考までに「月……澄む」と同形の用例を挙示すれば次の通りである。

○月も入かたになるままにすみまざりて
(源氏 明石巻)

○天の原ふり行くそらをながむればかすみてすめる春の夜の月(新拾 春上)

○空たかく澄みとほる月は影さえて、しばふに白き霜の明方(風雅 冬)

前用例文「つとめてより云々」中の「空澄みて」の個所は現存諸本中前田家本のみに「うち澄みて」とあつて、他の諸本間には異同がないらしい。草仮名「う(字)」と「そ(管)」、「ら(良)」と「ち(知)」とは互に字体が頗る近似している關係上、原文の「そら澄みて」が「うち澄みて」と無意識に紛れ、誤つて伝来されたものと考えられる。また、今年八月十五夜の様を述べてゐる。この「つとめてより云々」の用例文中に見える「月ありしよりも」の「ありし」は一体何時を指すのかを吟味するに、それは該用例文の前に見える。つまり昨年の八月十五夜の月明りの場面描出の「八月十五夜、常よりも明しと云ふ中にも雲なきに云々」の個所を意味することにならぬものだろうか。

(2)また「付録第一寝覚物語絵巻詞書註釈」の(四)第四段第五枚(雅子君冷泉院に拜謁す)四一頁のところに次の本文が見える。

ども、さる心にはありけるとて、え心つよがり果てたまはず、泣かせたまひぬる、いみじくいとほしくおぼゆれど、女にてたひらかにおはすめれど、いかでかは、あるかなきかに隠ろへたるさまになむと申す。

右の旁線の個所は雅子君の詞の一句であるが、この語句につき著者は、「生まれたのは女児であつて、女主人公の、その御産は平穩でいらつしやるようであるけれども」と註釈して居られる。今仮りに著者の解釈からして右の例文を文脈上から整理すれば、
生まれたのは女にて
女主人公 たひらかにおはすめれど

となろう。ところで、この本文の「女にて」の「にて」を吟味するに、このには指定の「なり」の連用形「に」に助詞「て」の付いた形で、「かをり美しきさまは、女にて見奉らまほしう清らなり(源氏賢木巻)」の「にて」と同様の形で、意味としては「…

…ニシテ・…トシテ」という指定の意となる。事態・資格を示す「ナニにて御元服し給ふ（源氏桐霊巻）」、「ただうとにておほやけの御後見をするなむ（源氏桐霊巻）」などの格助詞のにてとは異なることになる。しかも「女にて」の「にて」は、普通その下にくる「あり」・「おはす」・「候ふ」・「はべり」などと呼応して断定の意を表わすものである。著者が四一三頁においていられ

る「平かに、女にておはします（石山で大姫君誕生した時の一文）」も同様この「にて」。「おはします」とは呼応の形をなすものである。この見地からすれば冒頭の例文の「女にてたひらかにおはすめれど」は

女にて……おはすめれど

との形となる。従つて該文の意味は「女主人公は女の身として、安らかにいらつしやるように見えますが」となるのが語法上か

らも妥当ではなからうかと思われるが、如何がなものであろうか。

最後に筆を擱くに当り、氏のこの御労作に接し心から敬意を表すると共に、今後の御研究を期待してやみません。

〔塙書房 昭和四十年六月 A5判特製
四百四十九頁 二千七百円〕